

I—太陽と月 (天空の明暗)

日付			夜半の月			月出 (星座)			月没		
日	時分	(星座)	日	時分	(星座)	日	時分	(星座)	日	時分	(星座)
1	4:46	(ふたご)	1	0.2		1	4:48	(ふたご)	19	9:39	
6	4:48		2	1.2		2	5:48	"	20	20:21	
11	4:51		3	2.2		3	6:48	(かに)	20	20:51	
16	4:54	(かに)	4	3.2		4	7:46	"	21	21:50	
21	4:58		5	4.2		5	8:42	(しし)	21	21:47	
26	5:1		6	5.2		6	9:38	(六ふぎ)	22	22:13	
31	5:5		7	6.2		7	10:34	(しし)	22	22:37	
			8	7.2		8	11:30	(をとめ)	23	23:2	
			9	8.2		9	12:28	"	0	0:31	
			10	9.2		10	13:28	"			
			11	10.2		11	14:30	(てんびん)	1	1:2	
			12	11.2		12	15:34	"	1	1:40	
			13	12.2		13	16:36	(さそり)	2	2:25	
			14	13.2		14	17:35	(へびつかひ)	3	3:19	
			15	14.2		15	18:29	(いて)	4	4:22	
			16	15.2		16	19:16	"	5	5:31	
			17	16.2		17	19:58	(やぎ)	6	6:45	
			18	17.2		18	20:34	(みづかめ)	7	7:58	
			19	18.2		19	21:7	"	8	10	
			20	19.2		20	21:36	(う)	9	9:20	
			21	20.2		21	22:12	"	10	10:29	
			22	21.2		22	22:45	"	11	11:38	
			23	22.2		23	23:21	(ひつじ)	12	12:46	
			24	23.2					13	13:53	
			25	24.2		0	0:4	(をうし)	14	14:57	
			26	25.2		0	0:51	"	15	15:57	
			27	26.2		1	1:43	"	16	16:51	
			28	27.2		2	2:41	(ふたご)	17	17:38	
			29	28.2		3	3:42	"	18	18:18	
			30	29.2		4	4:42	(かに)	18	18:54	
			31	0.6		5	5:37	"	19	19:22	

II—天象

日	時分	天象
3, 16	—	水星が停留
4, 11	—	地球が遠日點
5, 8	58	金(北4°24')と月と合
6, 16	22	海(北5°55')と月と合
9, 19	13	火(北5°55')と月と合
11, 16	20	木(北6°11')と月と合
12, 11	—	水星が停留
14, 17	—	金星が降交點
14, 17	—	水星最大離角(西20°46')
16, 1	—	皆既月食
17, 5	—	火星が東距
19, 21	59	土(南6°21')と月と合
23, 19	9	天(南5°57')と月と合
25, 15	—	金(南2°36')と海と合
26, 17	—	水星が降交點
29, 15	16	水(北3°6')と月と合
29, 21	—	天王星が西距
30, 1	—	部分日食
31, 9	—	水星が遠日點

新月	7月1日 6時44分	満月	7月16日 14時0分
上新月	7月9日 7時28分	下弦月	7月23日 4時42分
	7月30日 18時32分		

主な流星群

日付	赤緯	赤緯	附近の星	性質
6月—8月	333°	+23°	ベガス座	速速短
6月—8月	303°	+24°	狐白鳥座	速速短
中旬	317°	+31°	水瓶座	速速長
29日—	339°	-11°	ペルセウス座	速速
15日	輻射點	15°	ペルセウス座	顯著
31日	移動	32°	ペルセウス座	痕痕

“Die Schrollen”

〔七月の夜番〕

牧人はゆるやかな傾斜に立つ、
もの憂く夕闇が空に軋り、
無数な焦慮が草叢にうごめく、
もうソロソロ太守の悪ふざげが
始まる、

愛人よ、そして鱈腹食つた家鴨
達、

早くお寐みなさいをすすめる、
そのランプには未だ少女の油が
残つて居る、

小ちやいながらも幸福な黄色い
灯影、

夜の祈りを忘れて君達の胸はは
づむ、

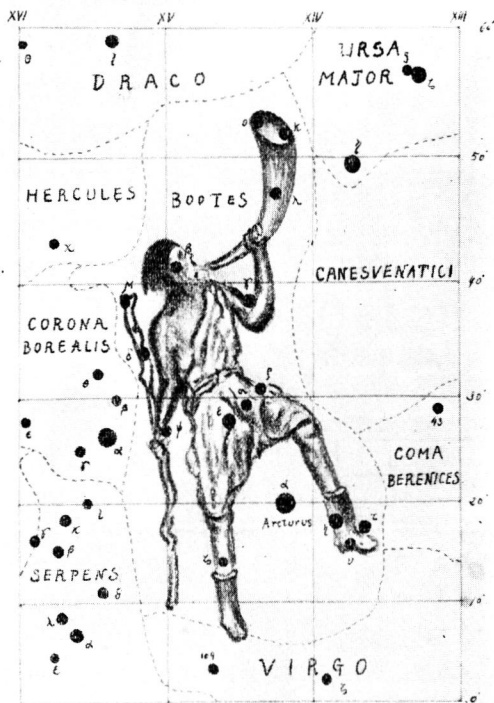
これは又衰れに stolpern して行
く或星の夜語り、

みはなされた角笛が嶺に遠吠え
る、

夜は百様の忍び姿となり、
小心な變星達の窓に近寄り、
深い緑色の遁辭、

みゝすが傷心した樂人であれば、
屋上の牝猫は失神する手を心得て居る、
火喰ひ蟲の何くはぬ胸算段、
寐つきの悪い君達の枕邊に、
月は遊女の様な聲で囁く、
〔知つてくるくせに……〕

古風なベツド、古風な夢よ、
もう〔さそり〕があのように過ぎ行つた、



いつもあれを見ると君達の先代様が偲ば
れる、

紅雀の好きな先代様、
最初の二匹はお妾の哀傷と媚態でとり入
つた、

やがて茲にも幾何級数が進行する、
限りない羽撃きの下で、

よにも打ちひしやがれた先代様、
〔そつと、そのまゝであれ〕

子供部屋が〔入らずの間〕になつたワケ。